

## 【暗証聖句】

詩編 50 編 14、15 節「告白を神へのいけにえとしてささげ、いと高き神に満願の献げ物をせよ。それから、わたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはお前を救おう。そのことによって、お前はわたしの栄光を輝かすであろう。」

## 【日・何よりもまず神を】

ユダ王国の第 4 代国王ヨシヤファト(紀元前 908 年 - 紀元前 848 年)は、その治世中、つかさたちを遣わして主の律法を民に教えたり、北イスラエルと和解したり、また城塞都市を強化するなど、精神的に活躍しました。勇猛果敢な性格で、北イスラエルのアハブ王から、アラムからラモテ・ギルアデを奪還する戦いに参加するように説得されると、その戦いに参加したりもしました。しかしその戦いに敗れ、ヨシヤファトは敗走することになってしまいます。預言者エフーは彼がアハブと手を組んだことを責めました。しかし、この経験は、後に困難な状況においてまず主に頼ることを学ばせました。治世の晩年、モアブ人とアンモン人が、メウニム人の一部と共にヨシヤファトに戦いを挑んでくると、「ヨシヤファトは主を求めることを決意し、ユダのすべての人々に断食を呼びかけた」(歴代誌下 20 章 3 節)のでした。そして、集まって来た会衆の中に立ち、「わたしたちには、攻めて来るこの大軍を迎え撃つ力はなく、何をなすべきか分からず、ただあなたを仰ぐことしかできません」(歴代誌下 20 章 12 節)と主に祈ったのです。すると、会衆の中にいたアサフの子孫のレビ人やハジエルに主の霊が臨み、こう言います。

「この大軍を前にしても恐れるな。おじけるな。これはあなたたちの戦いではなく、神の戦いである。」(歴代誌下 20 章 15 節)

「恐れるな。おじけるな。明日敵に向かって出て行け。主が共にいる。」(歴代誌下 20 章 17 節)

「ユダとエルサレムの住民よ、聞け。あなたたちの神、主に信頼せよ。そうすればあなたたちは確かに生かされる。またその預言者に信頼せよ。そうすれば勝利を得ることができる。」(歴代誌下 20 章 17 節)

何よりも主なる神を第一とし、主に信頼するとき、主が私たちの代わりに闘ってくださり、勝利を得ることができるのです。ヨシヤファトとユダの民がしたことは、主を讃美することだけでした。

「彼らが喜びと賛美の歌をうたい始めると、主はユダに攻め込んできたアンモン人、モアブ人、セイルの山の人々に伏兵を向けられたので、彼らは敗れた。」(歴代誌下 20 章 22 節)

私たちが大きな困難に直面したならば、そのときこそ主を第一とし、主に信頼し、主を讃美することです。その賛美の中で主が戦ってくださることでしょう。

## 【月・自分の力ではなく、神を信頼する】

ダビデがイスラエルの人口を数えたことがありました。それは戦争が起こったときに、自分たちにどれほどの戦力があるかを知るためです。王として当然のことをしているように思えますが、神様の目にはそのようには映っていませんでした。なぜなら、それは主の力を信じていないからに他ならなかったからです。主が戦われるとき、イスラエルに人が何人いたとしても全く関係がないのです。私たちが注目しなければならぬのは、イスラエルの人口を数えさせた背後に、サタンがいたということです。

歴代誌上 21 章 1 節「サタンがイスラエルに対して立ち、イスラエルの人口を数えるようにダビデを誘った。」

もし期待していたよりも数が少なければ、不安になって眠れなくなってしまうかもしれません。それは不信仰を助長することになることでしょう。逆に数が多ければ、それに頼って、神様に助けを求めなくなってしまうかもしれません。どちらの結果だったとしても、信仰にとってはマイナスな影響となります。神様にすべてをゆだね、頼るならば、数を数える必要などないのです。

このようなサタンの誘惑に対し、イスラエルの司令官であったヨアブはダビデに、「主君はなぜ、このようなことをお望みになるのですか。どうしてイスラエルを罪のあるものとなさるのですか」(歴代誌上/21 章 3 節)と進言しますが、ダビデは取り下げることはありませんでした。神様はダビデがしたことを神様に対する悪とみなし、イスラエルに疫病をもたらされたので、イスラエル人のうち七万人が倒れてしまったと記録されています。ダビデが頼りとしたイスラエルの数を、神様は疫病によってさらに 7 万人も減らされたのでした。

このダビデの経験を現代に私たちに置き換えるなら、たとえばそれは貯金の残高がいくらあるのかをいつも心配して数えているようなものです。過度にお金のことが心配になると、神様はそれが不信仰からくる心配であることを教えるためにイスラエルの民が 7 万人倒れたように、あえて思わぬ失費をゆるされ、貯金の残高を減らされるということがあるかもしれません。実際そのような経験をさせられたという方も少なくないのではないのでしょうか。

## 【火・簡潔にする時が来たのか】

引っ越しをするときは、しばしば今ある荷物を全部持って行くことが出来ないことがあります。たとえば、引っ越し先の家が今の家よりも狭い場合、荷物を減らさないと入りきらなくなってしまいます。その意味で、引っ越しは荷物を整理する良いチャンスかも

れません。ところで、私たちはやがて天国へ引っ越すわけですが、そのときには、荷物を一切もっていくことができません。すべて地上に残して行くことになります。

また、ペトロの手紙二 3 章 11 節に、「このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません」とあるように、この世界はやがてすべて滅び去ると預言されており、そうなれば私たちはすべてのものを失うことになります。まるでそれは、天国に行く前に、地上の物をすべて処分するかのようです。

私たちは、そもそも何も天国に持って行く必要などないのです。必要なものはすべて揃っているからです。仮に今持っているものを天国に持って行ったとしても、それは全く使い物にならないことでしょう。たとえば、世界中の多くの人が手放すことのできないスマホも、天国では使うことはないでしょう。

そこで SS ガイドが進めているのは、今から天国へ行く準備として、生活を簡素化し整理することです。祝福に満ちた生活 P70 に、「今こそ、財産を増やさないで、むしろ整理すべきである。我々はもっと良い国である天へ引っ越そうとしている。だから地上の住民にならないで、持ち物をできるだけ簡素にしよう」と書かれてあります。本当にその通りです。

## 【水・優先すべきもの】

マタイによる福音書 6 章 24 節

「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

神様に心から仕えているときは、富の誘惑は消えていくものです。しかし、逆に富に誘惑に心がとらえられると、神への思いが薄らいでいきます。確かに、イエス様が言われる通り、私たちは神と富とに仕えることはできないのです。私たちはどちらに仕えるのか、自分で決断しなければなりません。

ヨハネの手紙一 2 章 15～17 節「世も世にあるものも、愛してはいけません。世を愛する人がいれば、御父への愛はその人の内にありません。なぜなら、すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出ないで、世から出るからです。世も世にある欲も、過ぎ去って行きます。しかし、神の御心を行う人は永遠に生き続けます。」

欲望や生活のおごりは、神様からは来ないと聖書は断言しています。肉の欲をかき立てるものは、すべてサタンが私たちを神様への愛から遠ざけるために作り上げたものであり、私たちの中に潜んでいる欲望を刺激します。神様が私たちを誘惑することは決してありません。

「誘惑に遭うとき、だれも、「神に誘惑されている」と言うてはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」ヤコブの手紙 1 章 13～15 節

むしろ主は、そのサタンの誘惑に対して勝利するための力を与えてくださる方なのです。誘惑に負けそうになったなら、主を見上げることです。それが勝利の秘訣です。

## 【木・売ることも買うこともできなくなるとき】

ヨハネの黙示録 13 章 17 節「そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった。」

有名な世の終わりの預言の一つです。神様を信じる者たちは、やがて物を買うことも、売ることもできなくなると預言されています。物の売買で成り立っているこの世界で、もはや生きることが出来なくなるとを意味しています。しかし、どのように生きていけば良いのかなどと悩む必要はありません。主は言われました。「空の鳥を見るがよい」「野に咲く花を見るがよい」と。すべて主が養っておられるのです。だとしたら、私たちはなおさらではないかとイエス様は言われたのです。むしろ、この物欲の世界から解放されることを喜ぶべきかもしれません。おそらく私たちは一つに集まって、互いに助けあって生きることになるのではないかと思います。そして、このような困難な状況は長くは続きません。耐えられないような試練は決してないからです。耐えられなくなる前に、イエス様は再臨されることでしょう。また、申命記 14 章 23 節に「・・・常にあなたの神、主を畏れることを学ばねばならない」と書かれてあります。主を畏れるとは、主を信頼するということです。詩編 31 編 20 節に、「御恵みはいかに豊かなことでしょう。あなたを畏れる人のためにそれを蓄え、人の子らの目の前で、あなたに身を寄せる人にお与えになります」と、主を畏れることと、主に身を寄せる、つまり頼るということが並列で書かれています。それは両者がほとんど同じ意味で使われているということなのですが、どちらの場合も主が豊かな恵みをもって支えてくださると続いています。主を畏れ、信頼するものに対して困ることのないように、主はいつも必要を満たしてくださるのです。